様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０３３１８

研究課題名（和文）育児期女性における虐待傾向の関連要因に関するエスノグラフィー的研究

研究課題名（英文）Ethnographic study of related factors of maltreatment tendencies in mothers raising infants

研究代表者
春日　由美（Kasuga, Yumi）

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：８０５２５５８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では乳幼児を育児中の女性の虐待傾向の背景について検討した。インタビュー調査と文献研究を行い、以下のような成果が得られた。（1）「育児困難感」は母親自身が困っている子どもへの感情であり、「育児不安」は育児における漠然とした不安で、母親自身の不安と考えられた。（2）虐待傾向にある母親の怒りの契機には、時間的余裕の無さ、子どもができるのにやらないという思いがあり、母親の特徴として、他者に悩んでいることを正直に言えない、よい育児の理想があると考えられた。（3）虐待傾向にある母親は人間関係を重視したり、日常的に不快な感情を抱えていたり、長子に対して葛藤を抱えている可能性があった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義や社会的意義として、（1）「育児困難」と「育児不安」は別のものであり、支援者が分けて捉えなければ支援を誤る可能性があることなど今後の研究や実際の育児支援における支援の視点を示したこと、（2）虐待傾向のある母親の特徴について複数の視点を示したこと（子どもができると思い込んでいる、良い子育てをしなければと思い込んでいる、人間関係を重視している等）、（3）虐待傾向にない母親の特徴について複数の視点を示したこと（自分中心の考え方をしている等）、（4）ハイリスクな事例での虐待を防ぐ要因についての視点を示したこと（母親自身の援助要請力、支援者による一歩踏み込んだ支援等）等が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the background to women's maltreatment tendencies among mothers caring for infants. Interviews and a literature review were conducted and the following results were obtained. (1) Childcare difficulties were considered to be the mothers' own feelings towards their children, while childcare anxiety was considered to be the mothers' own vague anxiety about childcare. (2) Mothers with a tendency towards maltreatment were thought to be motivated by feelings of not having enough time and children can do it but don't, and were characterised by not being honest with others about their problems and idealising good parenting. (3) It was considered possible that mothers with maltreatment tendencies were relationship-oriented, had unpleasant feelings on a daily basis and were conflicted about their eldest child.

研究分野：臨床心理学

キーワード：マルトリートメント　虐待傾向　母親　乳幼児期　育児　女性　テキストマイニング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、児童虐待相談件数は年々増加し、虐待死は年間約 80 人にものぼる。平成 28 年度の児童相談所における児童虐待での対応件数は 20 年前の約 30 倍となっており、虐待の加害者の半数は実母である。また、一般の母親においても母親の 4 分の 1 は子育ての困難を感じ、10 分の 1 は自分が虐待をしていると思っていることが報告されている（小児保健協会，2011）。また、臨床心理士・公認心理師でもある研究代表者は、多くの母親から子どもや子育てに関する相談を受けてきた。その中で、一見、どこにでもいる母親が自ら相談を申し込み、「大声で子どもを一日中怒鳴ってしまう」「叩くのがやめられない」など述べることも少なくなかった。

一方で、これまで虐待傾向と母親の様々な要因との関連を示唆する研究は多くなされてきたが、これまでの質問紙調査による研究では、各研究者が虐待に関連すると想定したそれぞれの要因から調査を行うため、それ以外の側面について検討することができない。そのため、どのような要因が絡み合った時に虐待傾向が高まるのかについては研究の蓄積が十分にはなされておらず、実際の虐待の予防や改善に十分に繋がっていなかった可能性がある。また個々の母親における要因間の複雑な関連については、質問紙調査で検討することには限界がある。坂井（2002）は、虐待について特定の要因を追求することは意味がなく、虐待は子ども、親、家族、地域等の要因が互いに深く影響することを指摘していたが、母親の要因だけでなく、取り巻く環境を含め、個別に検討する必要があると考えられた。

２．研究の目的

個々の母親への半構造化のインタビュー調査を行うことで、虐待に関連すると考えられている個人的要因・環境要因について、どのような要因が重なることが虐待傾向に繋がるかについて明らかにすることである。

３．研究の方法

本研究では、乳幼児を育児中の母親の虐待傾向の背景について検討することを目的とした。方法として、育児や虐待傾向に関連する用語の整理と、半構造化のインタビュー調査をもとにした検討を行った。

【研究Ⅰ．文献研究】

虐待につながる可能性があるが、曖昧さが指摘されている「育児困難感」と「育児不安」の２つの用語について、これまでの研究等をもとに整理を行った。

【研究２．調査研究（インタビュー調査）】

乳幼児を育児中の母親（13 名）を対象に、半構造化のインタビュー調査を行った。インタビュー内容は、家族の属性、母親自身、子ども 、子育て、夫、自分と夫の実家、友人、地域住民、子育て支援機関やその他の施設や専門家、保育所や幼稚園等、経済状況や就業状況、将来についてである。なお、1 名は通院歴（以下、臨床事例）があり、他の 12 名と別に分析を行った。

（1）分析 1：虐待傾向がある母親の特徴についての定性的分析

12 名のうち虐待傾向がある 3 名について、SCAT（Steps for Coding and Theorization）（大谷，2007；2019）を用いて分析を行った。

（2）分析 2：虐待傾向がある母親とそうでない母親についての定性的分析

12 名全員について、中原ら（2022）と事例‐コード・マトリックス（佐藤，2008）を参考に、虐待傾向がある母親（3 名）とそうでない母親（9 名）のそれぞれの特徴について検討した。

（3）分析 3：虐待傾向がある母親とそうでない母親についての定量的分析

12 名全員について、NTT データ数理システムの TMS（Text Mining Studio Ver.7.1.2）を用いて、テキストマニング分析を行い、虐待傾向がある母親（3 名）とそうでない母親（9 名）のそれぞれの特徴について検討した。

（4）分析 4：ハイリスクの母親についての定性的分析

臨床事例 1 名について、SCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて分析を行った。

４．研究成果

【研究Ⅰ．文献研究】

検討の結果、「育児困難感」は、実際の母親を取り巻く要因の中で、母親が子どもと対峙することで「母親自身が困っている」状態を示すと考えられた。そのため、「育児困難感」がある場合は、子どもを含めた母親の周囲の人的環境を視野に入れながら、母親の困り感に焦点を当て、具体的に困難を解消するサポートを行うことが必要と考えられた。また、「育児不安」は母親が育児をしていく中で通常感じるものであり、問題なのは、それが過度な場合と考えられた。また、子どもへの無関心のために「育児不安」を感じない場合があることも留意すべきと考えられた。加えて、ほとんどの母親が「育児不安」を感じるのが当然であれば、「育児不安」と虐待を直結して捉えてしまうことは、逆に母親の「不適切な育児不安」を高めることになり、更に母親を追

い詰める可能性が考えられた。
　そして「育児困難感」は、実際の子どもとの関わりの中での負担や困難感といった「子どもへの感情」であり、「育児不安」は漠然と母親の中にある不安や迷いという「母親の精神状態」であると考えられた。これらをもとに、「育児困難感」「育児不安」を 2 軸とし、母親の状況を①安定型、②不安型、③困難型、④不安困難型、⑤希薄型の 5 つにタイプを提示した。

【研究２．調査研究（インタビュー調査）】

（1）分析 1：虐待傾向がある母親の特徴についての定性的分析

　虐待傾向のある母親の特徴として、怒りの契機には、①時間的余裕の無さ、②子どもが本当はできるのにやらないという考え、の 2 つがあることが明らかになった。また、母親自身の特徴として、①周囲の具体的なサポートがあったり、他者との交流は豊でも、他者に自分が悩んでいることを正直に言えないこと、②こうあるべきというよい育児の理想がある、の 2 つがあると考えられた。加えて、対人関係の特徴として、①夫の家事育児の参加の程度に関わらず、また夫との会話の量や質に関わらず、夫に分かってもらえないと感じていること、②夫や自分の親からの実際のサポートのある無しに関わらず、夫や自分の親に心理的または現実的に頼れなさを感じていること、の 2 つがあることが示された。

（2）分析 2：虐待傾向がある母親とそうでない母親について定性的分析からの比較

　これまでの研究で指摘されることが少なくない母親自身の特徴や子どもの要因（育てにくさ、性別、子どもの数等）、夫の育児参加や家族のサポートのいずれも、虐待傾向がある母親とそうでない母親で差は見られなかった。これらから、母親や子どもの特徴、夫やその他の家族の家事育児のサポートの有無だけでは、虐待傾向を推測することは困難であることが考えられた。一方で、虐待傾向がある母親において、不適切な関わりが起こる際の共通点として、「できるでしょう」「何でできないの」という言葉があり、一方虐待傾向がない母親では子どもは自分の思うようにはならないという「諦め」の言葉が特徴的であった。これらから、不適切な養育を行う母親は共通して、子どもをコントロールできると考えている可能性があること、不適切な養育を行わない母親は子育てへの上手な諦めができていることが考えられた。また従来の虐待のリスク要因は、必ずしも当てはまっていない可能性が考えられた。

（3）分析 3：虐待傾向がある母親とそうでない母親について定量的分析からの比較

　虐待傾向のある母親の発言の特徴として、他者から自分への視線や、自分から他者への視線を意識するなど、対人関係に意識が向きやすいことが考えられた。また自分が怒ることや怒られたこと、子どもが泣くことや怒る自分への嫌悪など、日常的に不快な感情を抱えていることが考えられた。そして、長子に対して可愛いと思えないなどの葛藤を抱える場合があると考えられた。一方、虐待傾向のない母親の特徴として、自分の健康を重視したり、自分の行動が印象に残りやすいなど、また子育てを含めて、自分を中心に思考しやすい可能性が考えられた。

（4）分析 4：ハイリスクの母親についての定性的分析

　妊娠前から心理的サポートを必要としていたハイリスクな母親が虐待に至らなかった要因として、①危機を想定し支援先を事前に探し、率直に困難さを伝えて支援を獲得できる本人の援助要請力、②家族の具体的な支援、③各支援者による母親の状態に応じた一歩踏み込んだ支援、④複数の異なる支援が重層的に得られる環境、⑤子どもが育てやすい子であったこと、が考えられた。一方で、産後危機的な状況も生じたが、その要因として、①退院直後に心身ともに疲労しやすく育児方法が分からずリスクが高いと考えられる時期に具体的支援が得られなかったこと、②産後 3 ヵ月目の心身共に疲労が蓄積していた時期に訪問による支援が途切れたこと、の 2 つが考えられた。

【研究成果のまとめ】

　本研究の目的は、虐待に関連すると考えられている個人的要因・環境要因について、どのような要因が重なることが虐待傾向に繋がるかについて明らかにすることであった。今回の一連の研究結果から、これまでの研究で指摘されてきた個人的要因や環境要因があってもなくても虐待傾向につながることが考えられ、従来の虐待のリスク要因のみに注目しても、虐待を予防したり、発見することは困難であることが考えられた。
　一方で、虐待傾向のある母親は、どのような環境であっても、よい育児をしたいという理想があったり、母親自身が思うように子どもを育てようとしたり、コントロールしようとすると考えられた。また、対人関係に意識が向きやすく不快な感情を常に抱えており、サポートがあっても分かってもらえないと感じたり、頼れないと感じるなど、現実の周囲のサポートに関わらず、孤独でストレスフルな育児を行っていることが考えられた。この状況は「育児不安」でなく、「育児困難感」にあてはまると考えられ、虐待傾向のリスクアセスメントでは、「育児不安」以上に、「育児困難感」に注目することが必要と考えられる。他方、虐待傾向にない母親は、子どもは思い通りにはならないと考えるなど、自分と子どもを別人格として捉えていたり、自分の健康を重視し、自分を中心に物事を考えるなど、子育てをしながらも、自分を大切にしつつ、同様に子どもも一人の個人として認めている可能性が考えられた。これらのことから虐待を防ぐための一つの方法として、育児支援において、母親に育児について伝える際に、まず母親自身が自分を大切にすることの重要性を伝えること、くわえて子どもは親とは別人格であり、親の思い通りにはならないということを明確に伝えることが重要であると考えられた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 春日由美	４．巻 12
２．論文標題 母親の育児困難感および育児不安の定義に関する文献的研究	５．発行年 2021年
３．雑誌名 山口大学大学院教育研究科附属臨床心理センター紀要	６．最初と最後の頁 27～36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 春日由美、田中理絵、川﨑徳子、天満誠也	４．巻 14
２．論文標題 テキストマイニングを用いた乳幼児を育児中の母親におけるマルトリート傾向に関する検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 山口大学大学院教育研究科附属臨床心理センター紀要	６．最初と最後の頁 13～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 春日由美
２．発表標題 母親のマルトリートメントの背景要因についての検討ー乳幼児の母親へのインタビューをもとにしたSCATを用いた質的検討ー
３．学会等名 日本心理臨床学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 春日由美
２．発表標題 ハイリスクな母親の虐待予防に関する検討：出産前後についてのSCATを用いた質的研究
３．学会等名 日本健康支援学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	川崎　徳子 (Kawasaki Tokuko) (00555708)	山口大学・教育学部・准教授 (15501)	
研究分担者	田中　理絵 (Tanaka Rie) (80335778)	西南学院大学・人間科学部・教授 (37105)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	天満　誠也 (Temma Seiya)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関